

寒い季節にもホットでアートな話題をお届け！

作曲家 柴山拓郎とヘンテコな音楽!!

「私は、学生たちと普通の音楽を楽しんでおられる方々からするととてもヘンテコな音楽と思われてしまうような音楽を心底楽しみながら作っているんです。」柴山拓郎氏は自己紹介の時にいつも決まってそう言う。ヘンテコなことを言っているぞ、とこちらはいぶかしむ。当人はなんとも楽しそうに話を続ける。

柴山氏は現在、東京電機大学理工学部情報システムデザイン学系の講師をしている。そこで作曲・音楽文化研究室という研究室を設け、日々学生たちと研究・創作活動を行っている。先日その研究生たちと談を交える機会があり、「いつもなにやってるの」と聞くと、「みんな好き勝手なことをやってます」と返事が返ってきた。彼らもまたなんだか楽しげだった。

大学3年の時にコンクールで入選、その後大学院を出てほどなく結婚。自分の曲がCDに収録されたり海外で演奏されたりし

始め、その頃は「このままいけばまあいいゆる作曲家としてやっていけるんだろうな」と考えていたそう。しかし2001年の9.11を契機に、「このまま続けていても仕方ない」という気分になって、作曲以外の勉強を色々始めた。社会的な動きに敏感になるよう心掛けたり、イラク反戦活動に没頭したりもした。そういった経験を通じて、「音楽」や「文化創造」に対する考え方が変わってきたそう。そんな時間を過ごしながら、五線紙に音楽を書くような作曲を完全に放棄。美術とのコラボレーションや電子音楽・コンピュータ音楽といったものに活動の軸足を移す。その後に埼玉県立近代美術館の中村誠氏と知り合い、SMFの活動に加わる。

SMFでは2008年度・2009年度と「音楽」という表現の拡がりとともに」というテーマのもと、埼玉県立近代美術館で、著名な音楽家を招いての電子音楽のコンサー



MOMAS 空間音響ライブ (2009 年)

ト(「MOMAS 空間音響ライブ」)や、研究生もまじえ広く一般の人たちと「ヘンテコな音楽を」作り、しかもその作品に喜びを感じてしまうようになろう!という趣旨のワークショップ(「MOMAS 音モニタージュワークショップ」)など多彩な企画を実施し、多くの人たちにこの分野の可能性をアピールしてきた。

3年目となる今年度は、まちや美術館で聞こえる様々な「物音」に改めて耳を澄まし、新しい「音の風景」を紡ぎだす「MOMAS サウンドスケープワークショップ」(11月28日(日))、身の周りのどんな音でも音楽になることを体験できる「MOMAS 音モニタージュワークショップ」(12月19日(日))、そしてゲストを迎えてのシンポジウムとピエール・シェフェール氏(1910-1995)を題材にしたドキュメンタリー映画の上映会(2011年1月16日(日))を実施するほか、美術館1階エントランスホールにて研究生たちと一緒に「サウンドオブジェ」(11月16日(火)～2011年1月16日(日))のインスタレーションを行う。一過性のイベントを行うのではなく、継続性のあるプロセスを経てもらうことで、参加者により重層的な感覚の拡張を促す。

「これが新しい音楽です!という主張を押し通すのは無意味だ。そういうのはある特定の文化に属する人たちの間でしか成立しない」と柴山氏は言う。とすれば「この音



MOMAS 音モニタージュワークショップ (2009 年)

SAITAMA 連携美術館 情報

ひろがる・つながる
ワークショップ

美術館ワークショップに参加したことはありますか? 例えば埼玉県立近代美術館では、展示作品をじっくり味わう鑑賞講座や技法体験工房、川口市立アートギャラリー・アトリアでは、アーティストを講師に招いての創作活動が盛んです。これらに共通しているのは、参加者同士が親しく話し、手や体も動かしながら、言葉を越えたコミュニケーションが生まれること。アートを身近に楽しむ試みが、埼玉県内各地の美術館でひろがっています。

年齢や社会的立場が違ってても、対等にやりとりできるのがアートの良いところ。この特性を最大限活かした多世代交流ワークショップが、11月13日(日)、23日(火・祝)にうらわ美術館で開催されます。対象は幼児から高齢者まで。自由な描画や写真を使った表現は、言葉以上に生き生きと作り手の個性を伝えます。互いに共感する場合もあれば、視点や感じ方の違いに驚く場合もあるでしょう。日常から一歩踏み出して創作に取り組む体験は、自分自身や生活の中の新しい発見にもつながるかもしれません。

内容手法も様々に、その日出会った人同士の心と世界がひろがる・つながるワークショップ。お近くの美術館でぜひ体験してみてください。(A.O.)



うらわ美術館「多世代交流ワークショップ」(2009 年)

楽は高尚なんですから」と偉そうになってしまいがちな現代音楽・美術館という領域の中に、「ヘンテコ」というどんな人でも自由に入り出ることができる遊び場を設け、誰かが作った音楽ではなく、誰もが聞こえている「音」を流し込むことで、やる側/見る側、教える側/教えられる側といった今まで当たり前だった関係から、お互いにもう一歩ずつ踏み出すことができるのかもしれない。(S.N.)

今年もやります。SMF ラウンドテーブル 2010

12月18日(土) 10:30～17:00 埼玉県近代美術館 講堂

昨年に引き続き、今年もSMF ラウンドテーブルが開催されます。ラウンドテーブルって何?と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、イメージ的には円卓会議。アート・建築・ダンス・パフォーマンス・音楽・文学・街づくりなど、様々なジャンルで活動している方々が、同じ立ち位置で情報を共有する場です。

実際にこの場で新しいコラボが生まれ、続々と実現しています。今回はどんな展開になるのでしょうか。今から楽しみです。自分の活動を紹介したい、発信したい、つながりたいと思っている皆様のエントリーをお待ちしています!(H.O.)



SMF ラウンドテーブル 2009

参加申し込み

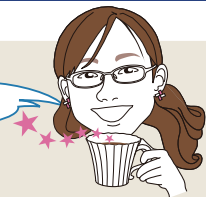
エントリーシート①に記入の上、メール(SMF.info@artplatform.jp)、FAX(048-824-0118)、または郵送(〒330-0061 さいたま市浦和区常盤9-30-1 埼玉県立近代美術館内)で「SMF ラウンドテーブル2010」係宛て12月10日必着でお送りください。エントリーシートはホームページ<http://artplatform.jp>から出力していただけます。エントリーシートの送付をご希望の方はSMF事務局(tel: 048-824-0110)までお申し付けください。

アートバンク登録

参加団体・個人の活動概要を紹介するファイルを作成、ラウンドテーブル2010参加者に配布するとともに、SMF ホームページに掲載します。登録ご希望の方は、エントリーシート②(アートバンク登録用)をご提出ください。

ご自由にプリントアウトしてください。

スズキと話そう③



市民と行政が手をつなぐまち、川越の魅力再発見！

今回の「スズキと話そう！」は、川越で活躍するアルテクト事務局長の草野律子さんと川越市立美術館教育普及担当の田中晃さんにお会いしてきました。秋晴れの気持ちのいい日曜日の川越は、観光客で溢れていました。今回はどんなお話が聞けるのでしょうか？

スズキ：私は川越に詳しくないのですが、「文化を作ってきたまち」というイメージがあります。お二人はどんなまちだと捉えていますか？

草野：蔵造りに代表される川越のまち並みの特徴は、一時代に偏らず各時代に繁栄し、江戸・明治・大正・昭和と時代を経るなかで、その時々流行の造作やデザインを採り入れながら建築が共存してきたところでしょう。専門家による問題提起を受け、それに呼応する市民により、昭和40年代から始まったまち並み保存運動が市民により継続され、現在のまちの元気につながっていると思います。文化を創り守るのは、市民の「まち」に対するプライドではないかと考えています。

田中：私は生まれも育ちも

川越です。高校時代から京都に関心があり、休みになると寺巡りをするために京都を訪れていました。そんな経験から川越の地域文化の魅力をもっと発信していくべきだと思っていました。実は、市単位だと、京都・奈良について、川越市は3番目に寺の多い場所。川越で中学美術教師になった時も、川越の地域性を活かした授業を行っていました。現在の美術館の立場では新しいものと古いものを繋ぎ、新しい魅力を発信するのが教育普及担当である自分の仕事だと思っています。

スズキ：どのようなことにこだわりながら活動をしていますか？

草野：アートを日常に落とし込みたいと思っています。「あるってアート2008」では、アーティストが川越のまち並みから感じ取ったものを作品化してもらったり、小学校でワークショップをしたり、地域に根差した活動を行いました。アートの存在によりその空間の特性が表れてきます。また、「まち」をアートの視点で歩くと、「まち」を見直すきっかけとなります。居心地のいい「まち」がどういうものか見えてくる、そして「まち」を造ってきた先人たちの知恵も見えてきます。まち並みが美しくなれば育つ人の心も豊かになると感じます。

田中：美術館は、年代も国も関係なくたくさんの方に対して発信することができま。美術は、生活の中から引き離された物だと考えられがちですが、学校ではまだに上手に（そっくり）描くことが良いといった指導があるような気がします。し



かし、学習指導要領も変わり、その人にあった自分なりの楽しさを見出すことが一番大切だと思います。美術館から学校や社会に発信することで、川越の動きに刺激を与え、文化意識を高めていくきっかけをつくるのも教育普及の仕事の一つです。行政の慣例や前例を打破できるのも実はアートの仕事。戦略的にアプローチすれば、アートだからできることがたくさんあります。アートは新しいものと古いものをつなぎ未来を作る架け橋となるものだと思います。

スズキ：お話をありがとうございました。行政と地域がバーサスの関係ではなく、コラボレーションをしていく関係なのですね。11月20日（土）～23日（火・祝）川越の旧織物市場で行われる「交差するまなざし」では、作家と子ども・地域と行政がアートで交差する時間となるはず。川越という小江戸のイメージですが、イメージは人が作りだすもの。まちのことを考える一人一人に支えられ、まちが作られていくのだと取材で改めて感じることができました。今回の企画を通してまた新しい川越の魅力を発見できるのが楽しみです。（M.S.）

草野律子：建築士・大学講師・アルテクト事務局長

埼玉県川越市生まれ。東洋大学工学部建築学科卒業。建築設計事務所パートナー。個人住宅を中心に、集合住宅、工場、学校、図書館、病院、ギャラリー等の設計活動を行っている。最近、ボランティア活動にも積極的に関わり、「川越・蔵の会」、アートとまちづくりを支援する「アルテクト」など、建築と「まち」をつなぐ活動を行っている。最近の作品掲載誌「建築設計資料76児童文化活動施設『東京子ども図書館』、医院建築22・医院建築秀事例集「うつみや痛みのクリニック」、チルチンびと28「S邸」、住宅建築2009年8月号「落葉松山荘」。現在、東洋大学ライフデザイン学部人間環境デザイン学科非常勤講師を兼務。

田中晃：川越市立美術館主任

高校卒業後、日本文化を肌で感じた単身京都で学生時代を過ごす。その後、中学校美術教師として川越市内4校を経て、2003年度より埼玉県立近代美術館の学校教育普及担当として勤務。そこで、学校における美術科教育と美術館における美術教育について考えつつ、美術と人々の関わりを探ってきた。その後、2009年には中学校に異動するも、翌2010年に地元の川越市立美術館勤務を命ぜられる。現在、美術館がアートステーションとして身近に存在し、美術が学校を変え、まちを変え、社会を変える原動力となるための様々な仕組みを画策中。



あるってアート2008

「アート井戸端かいぎ」印象記

8月1日（日）「なぜ人はお金にならない事をするのか」
10月3日（日）「twitter・mixiの可能性」

▶今回のお題では「お金にならない」という文言をあえて加えてみました。「お金が全てじゃない」とか「お金で買えないものがある」ということには、誰も（私もです）が同意するでしょう。文字通り、芸術はそもそもお金にはならないけれども、そういう価値基準には属さない「何か」なのでしょう。

ではその「何か」とは何なのでしょう。「芸術は素晴らしいものなのだから、その『何か』は素晴らしいに決まっているじゃありませんか」という意見が聞こえてきそうですが、なぜ、どんなふうに素晴らしいのかということを考えてみると芸術に対する考えが歩を進めるのではないのでしょうか。

ところで、近代以降、芸術の役割は大きく変化して、一般的な常識から考えるとどういふことなのかさっぱり理解しにくい芸術が多く生み出されました。その「一般的な常識」は言うまでもなく社会的なルールによって形成されます。そのルールは人間の振る舞いから形成されていくのですが、

同時にその社会的なルールは人間の振る舞いを規定します。であれば、芸術は、私たちが規定している一般常識や社会的ルールを、未来に向けて少しずつ押しひろげるためのカンフル剤のような役割を果たしているのかもしれない。（T.S.）



▶やっと秋らしい天気になった、心地よい午後の一時。美味しいスイーツと紅茶をひとくち…。というのも良いのですが、SMFのアート井戸端かいぎは熱いです！まだまだ夏です。定期的に開催している井戸端かいぎでは、ぐるっと円になり、わ

いわいと楽しくお話をしています。

今回のお題は主にtwitterやmixiの活用についてでした。今や多くの著名人も使っているこれらのメディアで、SMFの活動をもっと多くの方に知ってもらえないだろうか？そんなことを考え、これらのメディアの使い方や活用方法をレクチャーしました。そして参加者全員で、それぞれのメディアをどのように使えば良いのか意見交換を行いました。

こうしてSMFではまず、mixiを使ってみようということになりました。mixi内のコミュニティ検索で『Saitama Muse Forum』と検索していただくと、SMFのコミュニティが見つかります。これからこのコミュニティで、どんどん情報発信をしますので、皆さんも是非のぞいて行ってください。

また、次回のアート井戸端かいぎは12月4日（土）です。どうぞお気軽に遊びに来てください。（H.S.）

NHKさいたまFMラジオ番組「日刊さいたま〜ず」に生出演しました。

9月1日、SMFの活動を紹介するため、中村誠さん、藤井香さん、青山泰之の三人で「日刊さいたま〜ず」に出演しました。緊張しましたが、リポーターの下村寧（しずか）さんの質問に答えながら、15分間のオンエアー中に、スタジオ内部をスケッチしました。（Y.A.）



イラスト：青山泰之

◎「5750 展Ⅱ」と「体感する美術—サウンドアートから—」のちらい裏面の地図に、一部誤植がありましたことをお詫言いたします。